

平成 30 年 6 月 13 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02593

研究課題名(和文) 英語・日本語数量詞句の作用域決定を司る統語的・意味的要因に関する理論的研究

研究課題名(英文) A Theoretical Research on Syntactic and Semantic Determinants of Quantifier Scope in English and Japanese

研究代表者

本間 伸輔 (Homma, Shinsuke)

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：40242391

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、英語と日本語におけるeveryoneや「すべての人」などの数量表現を含む名詞句(以下、数量詞句)の作用域特性を決定する要因について、生成統語論の観点から考察を行った。具体的には、数量詞句の内部構造、数量詞句の統語的移動、数量詞句を含む節の構造が数量詞句の作用域の決定にどのように関わっているかという問いに答えるとともに、数量詞句の作用域の決定に関わる意味・談話的要因について検討した。以上の研究においては、従来指摘されていなかった事実を発掘するとともに、作用域との関連性が指摘されていなかった統語的要因を明らかにしたという点で意義があるものと言える。

研究成果の概要(英文)：This project has examined grammatical determinants of the scope of quantified noun phrases (henceforth, QPs) in English and Japanese, assuming the framework of generative syntax. It has sought to answer the question of how the scope of QPs is determined by their internal structure, the syntactic movement of them, and the structure of the clause containing them. Moreover, it has also examined what factors in semantics/discourse determine the scope of QPs. This project has observed some new facts about QP scope that had not been pointed out in the past literature and has found out the syntactic determinants of QP scope that had not been considered relevant to it. These can be said to be this project's contributions to the relevant research field.

研究分野：英語学, 言語学

キーワード：数量詞 作用域 統語論 英語 日本語

1. 研究開始当初の背景

(1) 数量詞句(以下, QP)の作用域を決定する仕組みについては, 生成文法理論の枠組みにおいて盛んに研究されて来た。May (1977) 以来, 数量詞上昇規則(Quantifier Raising)と呼ばれる不可視的移動を仮定した分析が行われて来た一方, 日本語などでの言語ではかき混ぜ(scrambling)による語順の変更の有無が QP の作用域解釈を決定するという観察が広く支持されてきた。

(2) (1)の先行研究の状況を踏まえ, 本研究代表者は, 本研究に先行して行った平成 24-26 年度科研費による研究にて, QP の内部統語構造と文構造, 移動規則の適用の関連性を検討し, 以下の から の成果を得た。

DP 指定部に数量詞を持つ QP のみに topic 素性(Miyagawa (2010))による A 移動かき混ぜが適用することが分かった。

の A 移動かき混ぜが目的語に適用した場合に, 目的語が主語よりも広い作用域を取ることが分かった。

と によって次の 2 例の作用域の違いが説明される。

- (i) 2冊の本をすべての学生が読んだ
(2冊 > すべて, すべて > 2冊 両方可
能)
- (ii) 本を 2冊すべての学生が読んだ
(*2冊 > すべて, すべて > 2冊)

(iii)のような「主語-目的語」の語順の場合に日本語で作用域読みの曖昧性が生じないという事実を, 主語の持つ topic 素性が目的語 QP の不可視的移動を阻止するという分析によって説明した。

- (iii) すべての学生が 2冊の本を読んだ
(すべて > 2冊, *2冊 > すべて)

一方, 英語で(iv)のように「主語-目的語」の語順で曖昧性が生じるのは, 英語では主語の持つ素性が 素性であり, 素性は目的語 QP の不可視的移動を阻止しないためであると分析した。

- (iv) Someone loves every boy.
(some > every, every > some)

さらに日本語においても(v)のように, 記述節(上山(2007))においてQPが「主語-目的語」の語順で生じる場合, 英語のような多義性が生じることを指摘し, 主語が topic 素性を欠くためであると説明した。

- (v) [2人の警官がすべてのVIPを護衛して
いるのが]見えた

(2人 > すべて, すべて > 2人)

2. 研究の目的

(1) 平成 24-26 年度科研費での研究では, 以上の から の点を明らかにしたが, これらと関連した次の課題, を本研究の主な研究課題とした。

日本語において「主語-目的語」の語順で作用域の多義性が生じるケースは の他にどのようなものがあるか。それらは と同様の説明ができるか。

上記 は主語と目的語との間の作用域関係について説明したものであるが, 二格QPとヲ格QP, ヲ格QPと動詞句副詞QPなど, 動詞句内のQP どちらの場合の作用域の多義性の有無をどのように説明するか。

(2) 上記 , について, QP の内部構造, QP の統語的移動の可能性, QP を含む節の統語構造, および以上と関連する意味・談話的要因といった観点から考察を進めることが本研究の主要な目的である。

3. 研究の方法

(1) 平成 27 年度は, 2 の 課題について, 平成 28 年度は 2 の 課題について研究を進めた。数量詞句の統語構造および意味・談話的特性, 作用域特性に関する先行研究のサーベイを行った。このために, 各課題についての最新の文献および最近の学会のプロシーディングを購入し, 検討した。また, 学会や研究会で最新の研究情報を入手し, 検討した。これと並行して, 数量詞句の統語構造, 意味・談話的要因と作用域特性の関連性についてのデータの整理を行い, 各データを説明する分析方法を検討した。さらに, 本研究代表者自身のこれまでの研究の再検討を行った。この期間における成果を論文 2 編として発表した。

(2) 平成 29 年度 は 2 の , の両課題について総括的研究を行った。これらの課題に関する, 最新の研究動向もフォローできるように文献のサーベイを継続した。また, 学会や研究会で最新の研究情報を入手し, 検討した。各課題に関する総括的検討を行い, 1 編の論文を発表した他, それまでに得た知見を活かした内容の学会講演を行った。また, この期間内の成果と平成 24-26 年度の成果をまとめた著書の刊行を計画中である(平成 30 年度研究成果公開促進費不採択。平成 31 年度再度応募予定)。

4. 研究成果

(1) 平成 24-26 年度科研費における研究では, 上述 のように, 記述節内の「主語-目的語」の語順の 2 つの QP が多義的な作用域解釈を

生むことを指摘し、主語 QP が topic 素性を欠くために、目的語の主語を越える不可視移動が可能になることにより逆作用域 (v) の「すべて>2」の解釈) が可能になると説明したが、本研究では同様の説明が、主節において主題の「は」を伴う句が生じる場合にもできることを観察し、説明した。

- (vi) 日本では、2人の警官がすべてのVIPを護衛する。
(2人>すべて、すべて>2人)

主節においては、文頭の主語が必ず topic 素性を持つものに対して、主題句が現れる場合は、topic 素性が抑圧されることにより、主語が topic 素性を担う必要がない。これにより、目的語が不可視移動により主語を越えることが可能になる。

- (2) 「主語-目的語」語順における逆作用域解釈は、主節において主語が文副詞に後続する場合でも可能である。

- (vii) a. たぶん2人の先生がすべての学生を指導するだろう
(2人>すべて、すべて>2人)
b. 2人の先生がたぶんすべての学生を指導するだろう
(2人>すべて、*すべて>2人)

事例(v), (vi)については、主語が topic 素性を欠くという分析を行ったが、(vii)は、多義性の有無が主語の統語的位置によって異なっていることを示唆している。(vii)においては、主語が topic 素性を欠き、vP 内にとどまっているのに対して、(vii)では、topic 素性により TP 指定部に移動している。副詞との語順の違いは、topic 素性の有無の違いであると言える。(vii)では、主語が topic 素性を持つために TP 内に移動するが、(vii)では topic 素性を持たないために、vP 内に留まり、副詞に後続する。(vii)で逆作用域解釈が可能なのは、主語が topic 素性を持たないためであると分析される。

- (3) 本研究でのアプローチにより、以下の事例も説明できる。

- (viii) a. 誰か^カが誰もを騙した
(誰か>誰も、誰も>誰か)
b. **3人**の女性が2人の男性を招待した(3人>2人、2人>3人)

(viii)の例はそれぞれ主語の「誰か」「3人の」に焦点を置いて強く読むというものである。Kitagawa (1994), Sato and Maeda (2018) では、主語を焦点化することによって、「主語-目的語」の語順であっても、目的語が主語よりも広い作用域を取ることが可能になるという観察を行なっている。

本研究では、以上の観察を以下のように説明する。topic 素性を担う要素は「主題-題述」の「主題」の部分になすものである(Miyagawa (2010))が、焦点を担う要素は、一種の新情報を表しており、そのような要素は題述になす要素にはなりうるが、主題としては相応しくないため、topic 素性を担うことができない。このため、(viii)の主語はいずれも topic 素性を欠き vP 内に留まることになる。主語を焦点化することによって目的語が主語よりも広い作用域をとれるのは、このためであると説明できる。

- (4) 日本語において、(ix)のように遊離数量詞を伴う QP (以下、F-QP) が前提的な解釈 (Diesing (1992)) を持つ場合があるが、それが語用論的な推論によるものではなく、F-QP の構造的な要因に基づく可能性を示唆した。

- (ix) 昨日泊まった客が3人今日帰った

(5) 上記(v)のように、記述節においては目的語が主語に対して逆作用域を持つことが可能であるが、そもそも記述節には「すべての犯人」のような前提性を持つ数量詞が生起しないという指摘がある(上山(2007))。これに対して、上述(v)のような場合は、QP の表す母集合 (v) では談話上話題となっている VIP の集合全体) 自体が新情報でありさえすればよいという分析を行った。

この分析が正しいとすると、QP の広い作用域を可能にするのは、QP の前提性ではなく、QP 内外の統語構造であるという本研究の立場を補強するものとなる。

- (6) 次例(ivb)のように、数量詞が遊離する目的語は主語よりも広い作用域をとることができない。

- (iv) a. 2人の女性をすべての男性が招待した(2人>すべて、すべて>2人)
b. 女性を2人すべての男性が招待した(*2人>すべて、すべて>2人)

これは、遊離数量詞を伴う QP (以下、F-QP) は topic 素性を持つことができず、そのためもっぱら vP 内で解釈されなければならないからである。

これに対し、F-QP が主語の右側にかき混ぜで移動した場合に内項 QP や付加詞 QP よりも広い作用域をとることが可能である。

- (v) a. 太郎は弁護士を2人すべての依頼者に紹介した。
(2人>すべて、すべて>2人)
b. 警察は逃亡犯を2人すべての監視カメラで捉えた
(2人>すべて、すべて>2人)

ただし、F-QP が広い作用域をとるためには、それが前提的な解釈(Diesing (1992))を持つ必要がある。例えば、(va)で「弁護士を2人」が広い作用域をとるには「特定の弁護士の集合のうちの2人」という解釈を持つ必要がある。

以上より、主語の右側へのかき混ぜに関しては、主語の左へのかき混ぜとは別のメカニズムが作用域の決定に働いていると言えるが、本研究では、TP と vP との間に「前提性」を認可する機能範疇があり、その中への移動によって内項よりも広い作用域が保証されるという提案を行った。この提案は、主語の右側へのかき混ぜが前提的な解釈を持つ名詞句に限られることがドイツ語やオランダ語に見られることから支持される。

(7) 研究期間を通じて得られた知見を英語教育に応用した。

英語の数量詞の解釈と作用域現象、および否定文の解釈 any などの否定対極表現の意味的性質についての解説記事を執筆した。

英語の数量詞のうち、some, many, all, any などの意味的性質について英語教員を対象とした講演を行った。

中学校「外国語(英語)」の検定教科書における any の日本語の訳語の妥当性について考察し、any と「何か」「いくつかの」などの訳語の意味を比較検討した。

(8) 以上の研究成果のうち、(4)を Homma (2016)として、(6)を Homma (2018)として、(7)を本間(2017)として、(7)を加賀他(2017)としてそれぞれ発表した。(1)、(4)、(6)は、平成 24-26 年度の科研費研究の成果と合わせて、図書として刊行することを計画中である((平成 30 年度研究成果公開促進費不採択。平成 31 年度再度応募予定)。(2)、(3)、(5)は現在論文を準備中である。

参考文献

- Diesing, Molly (1992) *Indefinites*, MIT Press, Cambridge, MA.
Kitagawa, Yoshihisa (1994) "Shells, Yorks and scrambled eggs.," In Merce González (ed.) *Proceedings of the Twenty-Fourth Annual Meeting of the North East Linguistic Society*, 221-239, GLSA, University of Massachusetts, Amherst, MA
May, Robert. (1977) *The Grammar of Quantification*, Ph.D. diss., MIT.
Miyagawa, Shigeru (2010) *Why Agree? Why Move?: Unifying Agreement-Based and Discourse-Configurational Languages*, MIT Press, Cambridge, MA.
Sato, Yosuke and Masako Maeda (2018) "Interactions of Phrasal Spell-Out

and Prosodic Phrasing: Evidence from Focus Intonation and Inverse Scope in Japanese," a talk presented at *6th Phex Workshop*, Niigata University.

上山あゆみ (2007) 「節の構造と判断論」, 長谷川信子(編)『日本語の主文現象』, 113-144, ひつじ書房

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

Homma, Shinsuke (2018) "A Note on Inverse Scope in Japanese," 『言語の普遍性と個別性』第9号, 25-40頁. (査読なし)

本間伸輔(2017), 「中学校英語教科書における any の訳語についての覚え書き」, 『新潟大学教育学部研究紀要』第9巻第2号, 245-251頁. (査読なし)

Homma, Shinsuke (2016) "A Note on the Presuppositionality of Floating Quantifiers in Japanese," 『言語の普遍性と個別性』第7号, 11-19頁. (査読なし)

〔学会発表〕(計1件)

本間伸輔(2017) 「英語の数量詞の意味について」, 新潟大学教育学部英語学会, 平成 29 年 7 月 29 日, 新潟教育会館.(招待講演)

〔図書〕(計1件)

加賀信広, 大橋一人, 本間伸輔他 (2017) 『授業力アップのための一歩進んだ英文法』, 開拓社, 308頁(分担箇所: 第14章「否定と数量詞」, 259-276頁)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

本間 伸輔 (HOMMA, Shinsuke)
新潟大学人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：40242391

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()